

中将姫一代記  
一

^ 13  
3294  
1



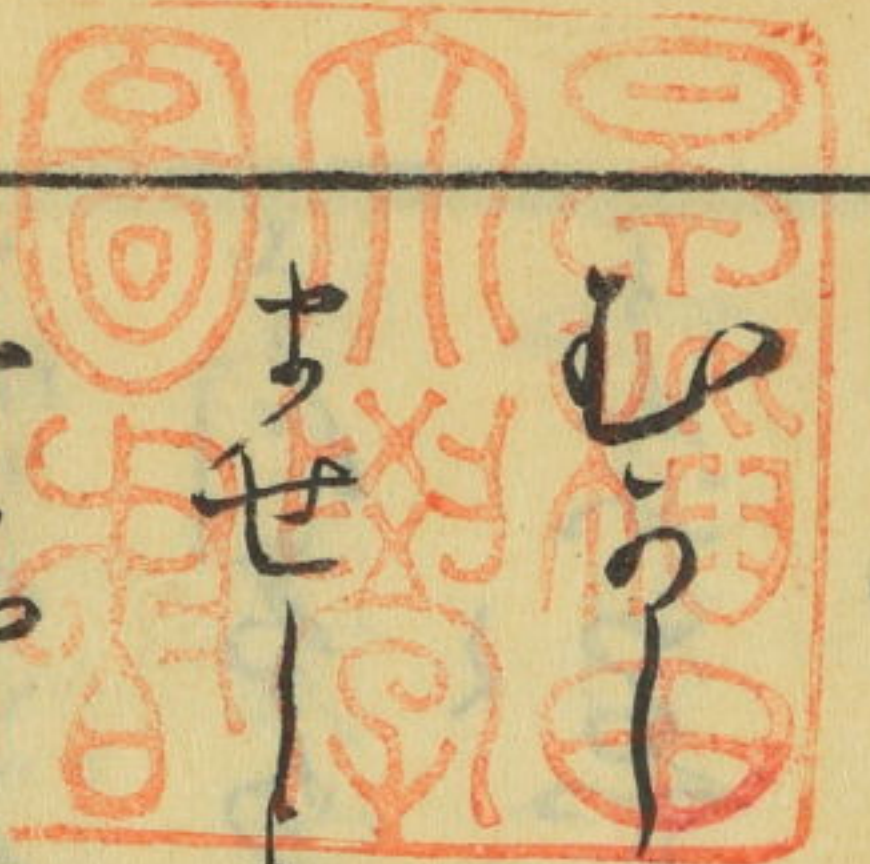


# 中将姫一代記

此書の中將姫生れの時、瑞り綾毎の綾を小くして雲雀宗  
持とて、ゆゑに書麻守小く刺髪まじり、法如縁尼と号し、弥陀  
観音二大聖の感得ありて、蓮の糸をひきて大曼陀羅を成り、  
極樂の莊嚴法諸人小く、ゆゑに善薩の來迎法得て、往生し  
て、佛法のありて、法縁ありて、生るるあり

## 序

いなり 釋尊御法法從て、庶生と救ひ



あせし 家漸國も侍り衆

とて、法如縁尼と号し、

とて、法如縁尼と号し、

とて、法如縁尼と号し、

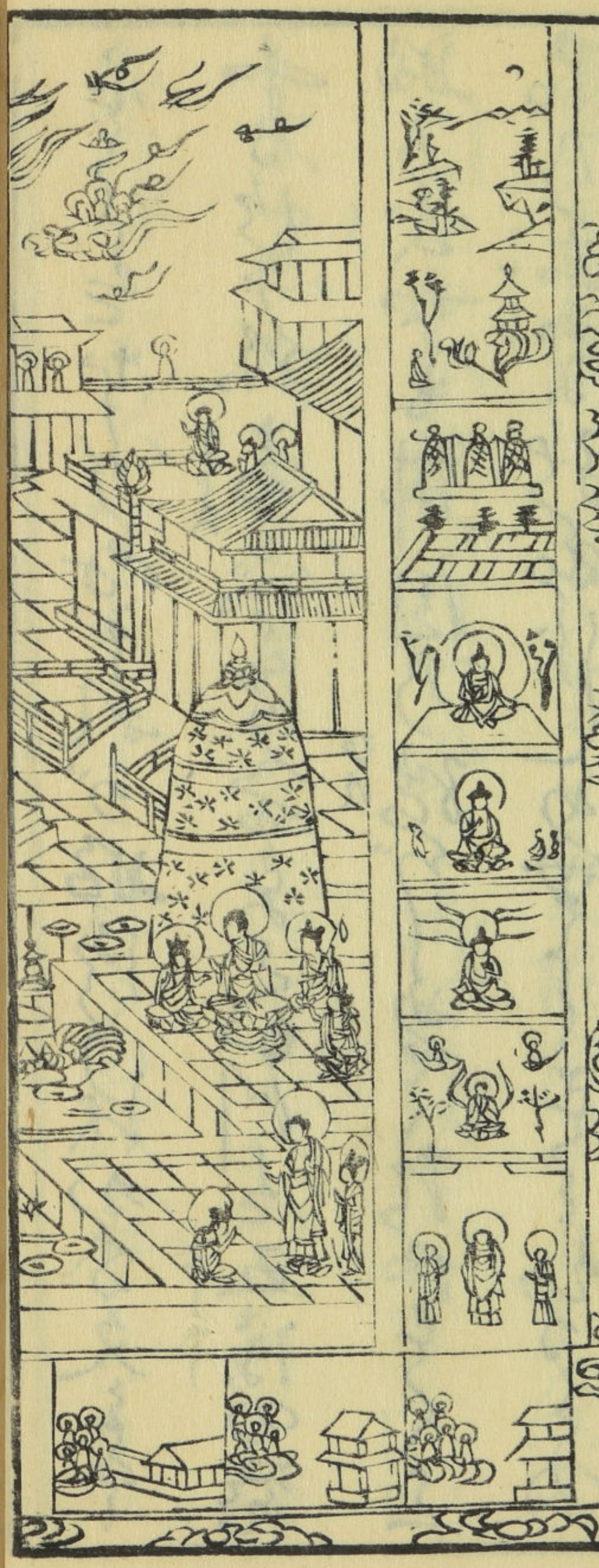
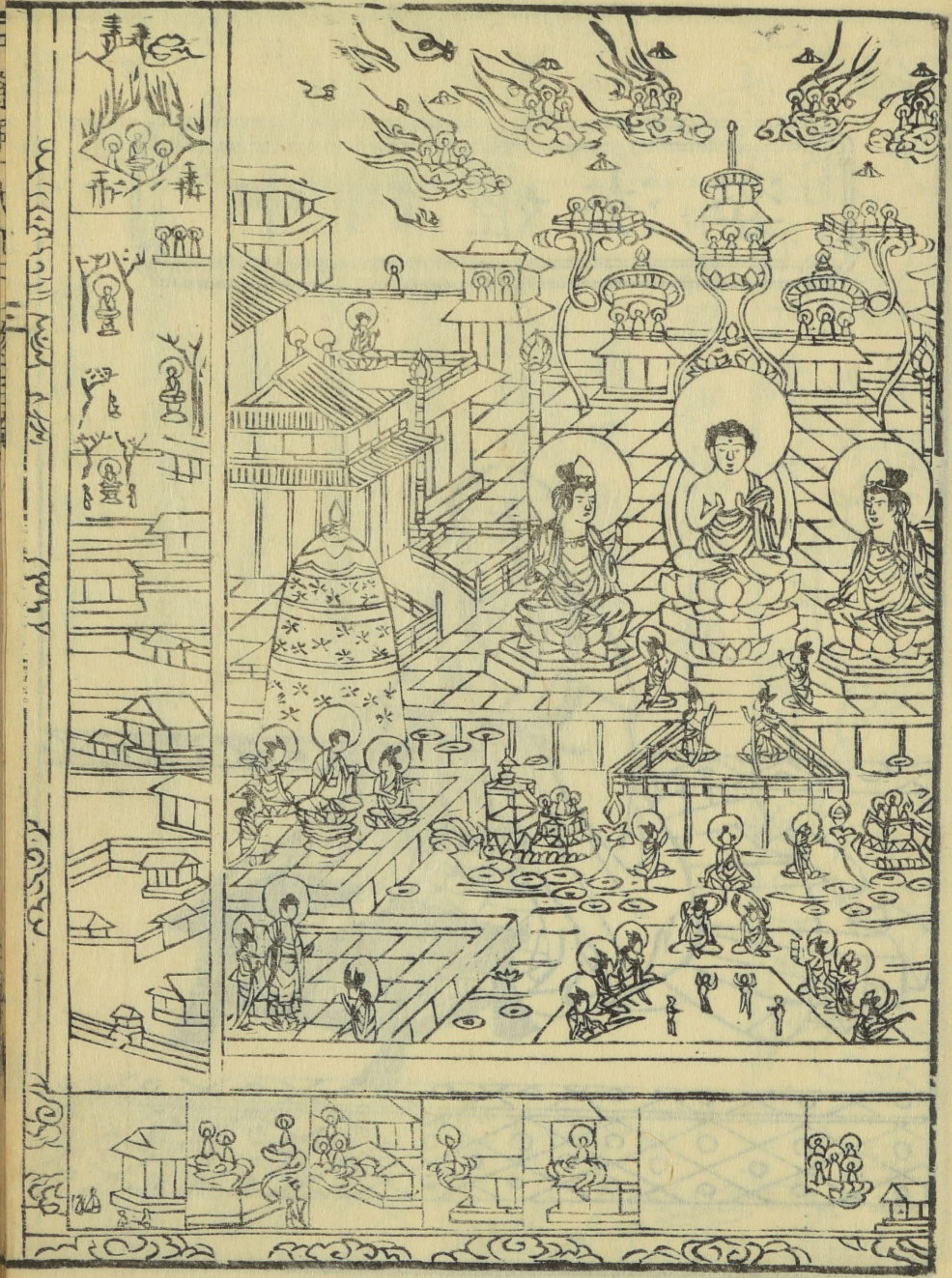
とて、法如縁尼と号し、

大正十年八月廿九日  
本大學出版部 贈

毎に雲をひきとどきさうりく縁の敷とおどしきなり  
袂をる毛染まわらぬとなしめひたはにちのいさへによ  
かろし一福ふ御佛の事恨よしくや極楽浄土の  
蓮華と織つむりかゝる曼陀羅まんたろくへも此状  
らんちあひぬされとて御に法後亦あは  
よふも思くひとやちる凡俗もよれわりの極  
楽浄土のいさへきこむたにみはちちきよまる

いさへきこむたにみはちちきよまる  
書はにれ赤あかきくもくもあひくも五徳ごとくの飛  
如にのよ女も佛国乃結むすぐめさしたるごと  
品乃素すまよひあはしめあひはるるるるの  
形はしこくたぬたえく

灌河道人識



曼伽羅者圖  
 味伽當麻寺  
 禪尼感得蓮絲  
 如

中將姫姿



中將姫一代記惣目録

卷之第壹

- 中將姫誕生の事
- 中將姫初言の事
- 北の方家の前巻きの事
- 卷之第貳
- 豊成郷後妻と逢ふ事
- 禁裏管絃の事

- 継母中將姫殺さんとせむ事
- 継母中將姫に毒酒と進めむ事
- 継母の願志圖火とたかり事

卷之第三

- 中將姫継母に雲雀山に控られむ事
- 時常娘漆雲勇智とたかり事
- 豊成郷雲雀山に遊獵の事
- 中將姫館と母いあむ事

卷之第四

- 中將姫當麻寺ゆく剃髪の事
  - 法如尼曼荼羅を感得しむ事
  - 三人の宮女法如尼の丹子と成身
  - 禁裏におく法如接圓問答の事
  - 法如禪尼正常が上ニ靈丹達む事
- 卷之第五
- 四人の盜賊教化強蒙の事

○山下藤月懐梅して出家とす

○高安郡清女出家とす

○法如禪尼諸人に曼荼羅と説示す

○法如禪尼臨終往生の事

附 練供糧起の事

中將姫一代記惣目録

中將姫一代記卷之壹

中將姫誕生之事

抑中將姫の縁由を尋る小入皇に十又代聖武天皇此清宇  
送一位右大臣撰佩乃朝臣豊成卿よりハ大織冠儻是公  
の孫正一位武智麻呂の嫡男なり次男ハ大納言藤原  
仲麻呂と名く豊成卿ハ聖武孝謙祿徳の二朝の天子  
に事て和漢の才一達一公に政又忠誠とほく一民と恤あ  
が故に諸人敬ひ崇むるに備代の家臣に因幡將監時常  
子孫承るに常同云良時業之人此卿と云備一をり  
威勢日月より一家門累代の繁昌は時なりと羨むるハあり

あふ小神龜に末天平に初れまうとよ聖武帝御不例ゆ事  
神腦をさうりかりしと曲薬清業と用ひさぬく心とるを  
其験なげしを討乃博士をけくたせめ先代の神道  
伐ありし者れ悪霊崇となれぬかり速く瘞免むこと  
奏しける是よりうく徳寺徳ふよ命じて加持祈禱あり  
とるをさうりかき強とちりける豊成卿ハ朝廷よ春内  
一晝夜天子と守護しちり夜ハ宮城の神門内寝ん白鳥  
警固しあふと折節に花門の邊りて其尺六尺余りけ妖怪  
赤れ髪とれしまねと八月にさうりける者神夜とさうりてま  
とるける豊成公神夜さうりけるを神腦をさる曲物ありと

大乃抜をねし追りけぬハ妖怪を威よおそと築垣よの不  
らんとさる赤と背より得りりと切付ぬハ名作乃大乃心え  
まで突通さると垣よりとく随ふとけく押付け頸おれた切  
大乃をよはけぬと陰陽博士がうらなひ悪鬼を豊成對治  
さうりと呼りしゆさうり禁中發因の諸將退くよん付  
神手扱の程と感賞せざるハかりり不思儀なるけみそ次  
よりさる神腦神公より後をく平愈ましくたれハ天子と  
豊成卿に勲功と睿聞有く神感ましく神褒賞して  
二位の侍從榮の赤とりて官女に申さくも容色美麗なる  
と賜王種に引お物賜りしを豊成卿も有く退出



ありて吉日と擇み婚姻着尾よく調ひたるより以来  
 比翼共飛りて連理れ交り法々く居りて十又幸れ  
 年月々々豊成卿もやどなく四十歳又及ひあつて  
 いせ子一人もまうまうひばことと歎きあひ者より  
 神明にいのりおひもあつてもとて夫婦心と合々本  
 願ひて誓ひとて先んいざや彼は後んと正時時業  
 一人れ子と與くまうませと丹誠と凝一行りて  
 七日は満る夜更もあつて現もあつて寶殿の心より一首  
 我小も祈らんよりたれ長谷は深き誓ひと

とありけれは中井女は信トあひ大悲の誓ひを頼め  
 との市院宣頼りし思ふに長谷も悉信ありて七日乃  
 乃通夜一あふ小何れ亦現もわたりしとて中井留て現  
 音妙智刀と頼りて後れするは満る曉れ着中に今示現  
 してのあり汝夫婦至誠れ願望もかく宿命天眼と依て  
 三千界と見え小汝が子とあるとて因縁れ者なり今示現  
 欲とまは汝夫婦中一人令れかくるものあん如何と告  
 たりて夫婦夢れ中に御返答やうはたとい一人の命は  
 ともく一かづの二子と授けしとて頼ひけれは白色の蓮花  
 と授けしとて汝が子とて一併らけし子三歳の時夫婦れ

中一人命終く我と恨の半かゝると告あり市史婦大よ  
 よろこびむい侍具とそなく恭敬尊重して下向まゝりく  
 小程かく紫れお沖懐胎ありく豊成卿沖懐むいどか  
 ざりたりはあは十二月とつて當て天平十九年八月十八日  
 晨誕生あり産室れ中老より懼と薫香郁くとて馨し  
 かりける豊成公沖子とああげ見ゆつて孫むとぞりける  
 かの姓君かり市史婦ハ之に及て一門れあむいむいなる法  
 方れ慶賀嘉肴珍酒とほりひてふとかりく不思議なる  
 うたふるぬ當今天子れ沖若小貴死傷一人未現ありて彼  
 撲佩家初生れ女子小疾く宦名と宣許あべと告めい忽

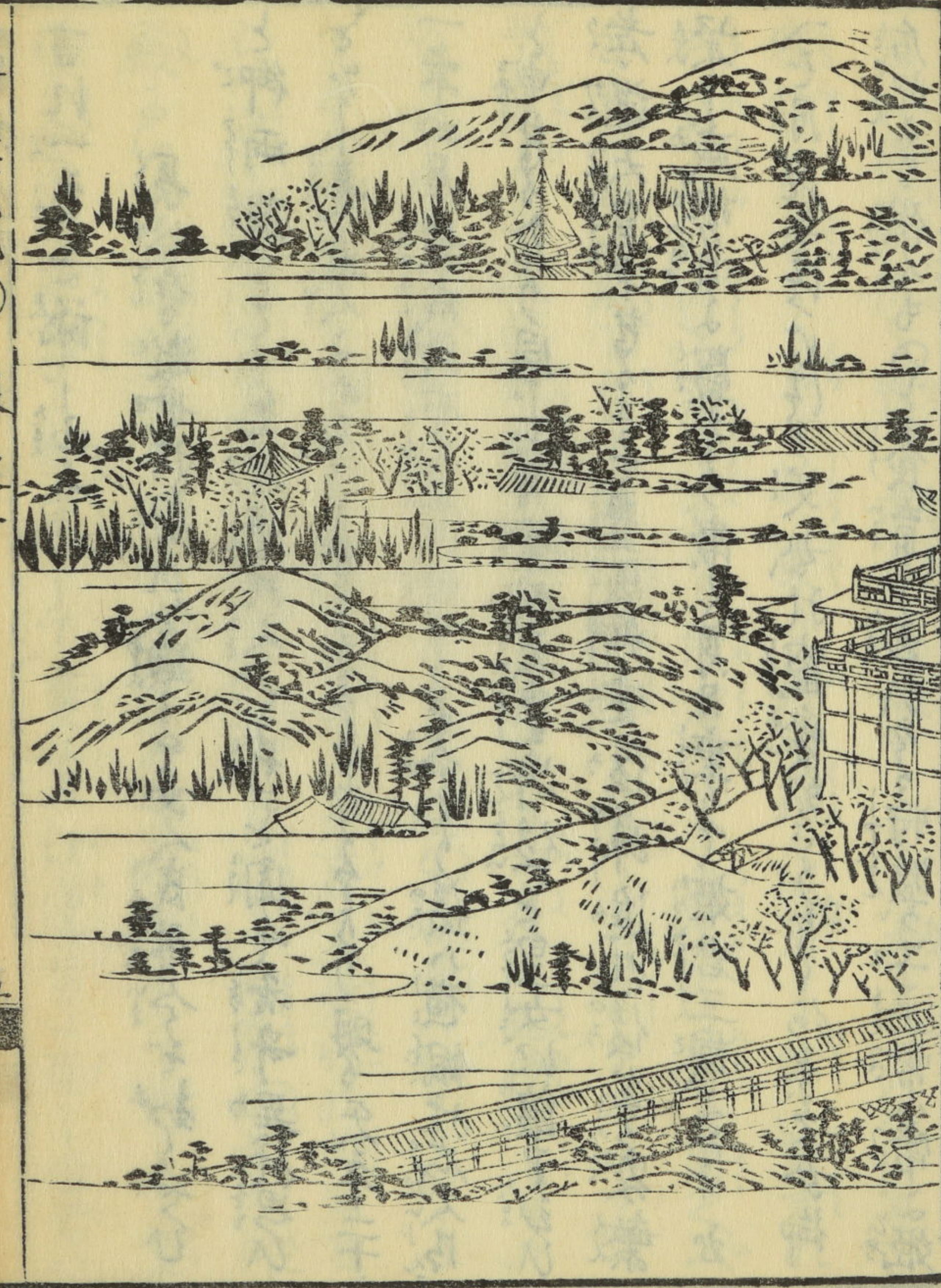
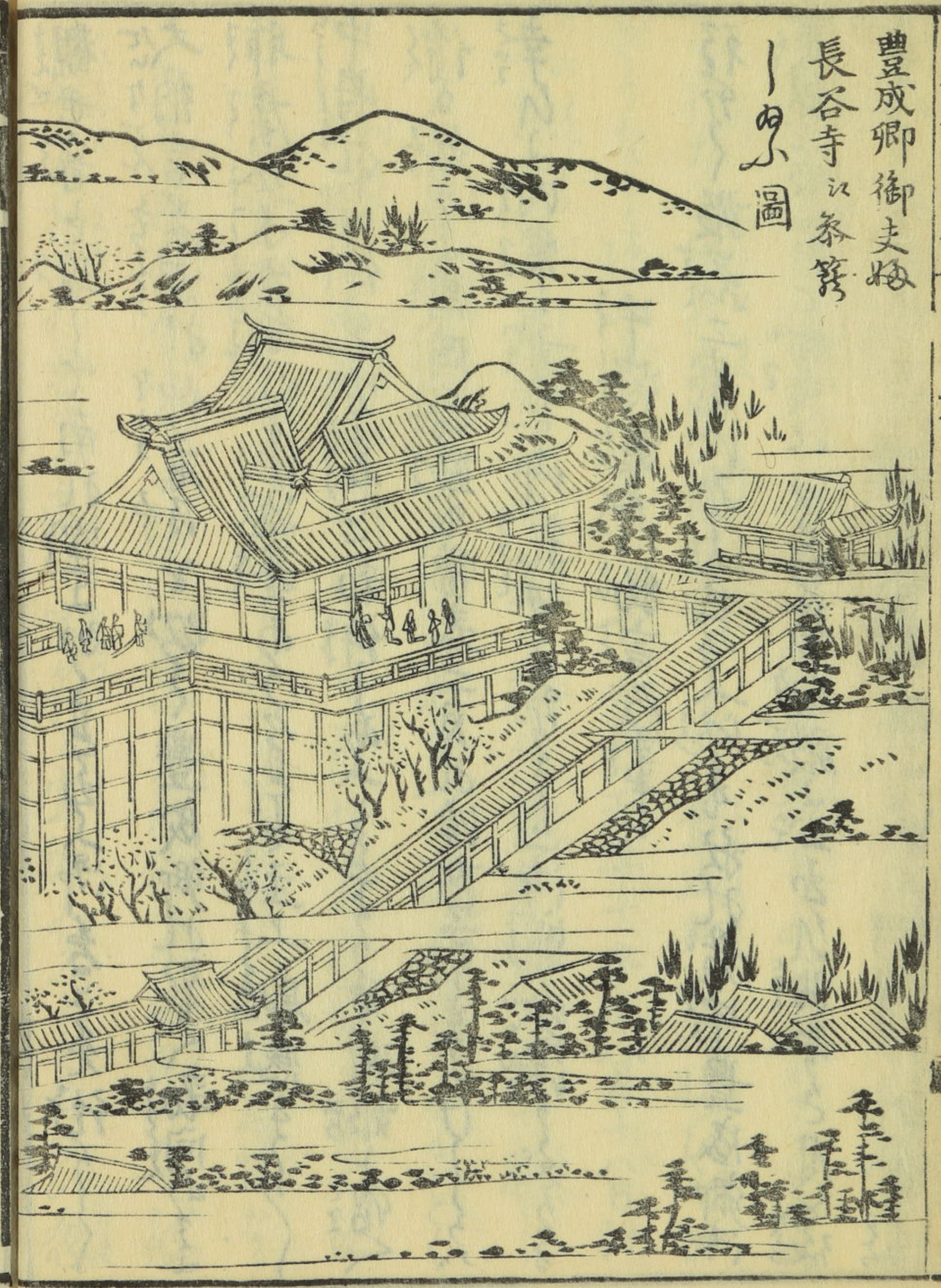
觀世音と現く南れ空よあくとむい沖若と免れり  
 大納言及原れ仲麻呂とぬく豊成卿れかく初問あり  
 昨晨女子出生れよ返奏ありたるを主上顧感ありり  
 中將れ内侍と宦名と勅許ありとて下り中將姫と稱く  
 侍然く國岡將監も當春二月れ頃女子とまうけり  
 幸いの時常く妻と御乳母よかりとて清寵愛あはるる  
 中將姫清幼言乃事  
 程りく姫君二歳にかりとせありけりも秋れ最中豊成卿清  
 史婦姫君と妹女にいとあゆ南殿よむい曲方をと月と孫  
 むつて姫君妹女れ勝よりりく西よむい合掌しむい沖初

中將姫行記 卷之二

豊成卿御支那

長谷寺以糸筑

一景圖



言に一首と詠しむ

長谷寺救世にちりいと顯して女人成佛今ぞおかしむ  
 と御兩親とて先近從れ人づく是と圍て各奇異れ思ひ  
 とか一是直人よおとげと貴まごころをかりり明り天平二十  
 一年四月豊成卿右大臣に任ぜると奈より後ハ横佩れ右大臣  
 と申せりかり同日七月聖武天皇御位と皇女に譲りし  
 孝謙天皇やせりて豊成卿官位昇進れ後ハその家繁  
 栄し威勢日々盛なり漸く月日重りて姫君三歳にたりむ  
 へて月夜おほけけはけけ父母に寵愛おほりたり何とて女御  
 后妃よも供んものと養育しむい々將監が子正常八常は姫  
 君れ御寢所と預り晝夜守護したるが或夜七八歳は童子  
 容貌と氣貴く白さ將東小雛の傍を署し餘は姫君れ  
 御寢所れ迄お侍立むる姫君内より妻戸と開き闔へ入  
 りぬ密終時と後しぬ入常是と見とるお怪ととなごて之  
 を終よ二歳は姫君の御事かむら其夜ハ徳便りたる  
 いうふしつもの心得おとれ事かむらむ變朝父時常にかくおとり  
 りとて當時も不審を多し吾直不見届若姪怪れ所為な  
 らバ速小退治とて其日れ暮と侍く當時姫君の御  
 殿まかり物影より伺ひ侍とてふ小夜園小く果しと童  
 子ありて姫君と對座しと童子ハ紅蓮華と座し姫君ハ

子ありて姫君と對座しと童子ハ紅蓮華と座し姫君ハ

白蓮華小端座し童子女曰は面よりや修し後世  
佛に道修く會得しありや若疑ひありお尋て  
定しとありきとて姫君一着を召く回玉く

佛に慈悲を修し聞もの成男女等も  
童子答く曰

佛に慈悲を修し聞もの成男女等も  
童子答く曰  
佛に慈悲を修し聞もの成男女等も  
童子答く曰  
佛に慈悲を修し聞もの成男女等も  
童子答く曰

至と禮拜して御寢所に入りて日常思ふ斯る不思議と  
拜し歡喜の涙小咽び恭敬尊重とるごとくなり實又大  
聖に善巧凡情の削り去るありは是とありて中將  
姫さまと小直人よれど權くまてまゝにたり光陰はうつ  
やとてやとて天平勝寶二年姫君とや四歳よりせ  
あしが春去夏移て秋も半過やんとするは帝親子と人後國  
みおの月乃衣とて姫君を寵愛しありて中伽の女官  
琴と彈し筆と候とて慰めたり中遊具ありしは秋風と  
うぐ庭に薄藩に用く森乃花も月映して面白くいと興と  
催しあひくる然るをふ何地ともなく一ツの板出たりと一巻の

中経とくましく思ひく氣をもかくくは例よあり彼経と  
娘君れ前に置きと取奉見よ、備讚浄土経と外題あり  
中経也姫君見よし一首と口ごここなまよ

法は唯れ音小授る中法はいりあるや説教ら糸  
斯くあり一付御生と一首と縁じて云く

西よりもこよまどる法の用し我名唱る人と守り

かこれと返弄して西に藩とて去り中史婦ハ御と  
見よくそ姫君ハ貴と傍と持せよかまきこと極楽

浄土に彌陀如來なる一中史婦ハ思儀れ想とあ  
彼経と開せよと緋紙令泥に中経ありかぞめるそと

中経と疎よりありくと申し常よはくそ姫君に授けぬ

そまより中將姫晝夜中分とまあらぬとそこのふが女

くは力とくお供もわく自力とく續編とねを越法罪の

過ありと何とぞ知識高傍とも後清く後と習た

思は朝夕須載恭敬のふのそかち

此れ方は此お豊死大と事

早其年もくねく勝實三年姫君五歳の生孫生れと折

柄櫛花に盛りちるよ豊成御御史婦姫君と伴い南の園

よ遊びのふま風小笠方櫛花紅白とと争ひ今と盛りと

咲くよとかぶるよありねは此年をむもくそとめとく

御家門に人々も懸は舞は終日御酒宴のりくいと真のり  
御一門の人々祝してやさむひるも今日秘花に遊ひこそ御夫婦  
姫君のよきみとのづる御者也を祓に目おなるとも各  
喜悦一のふとふれく御臺所のわさといつぞや長谷谷  
系終一しけ姫が事と行りて又親孝に御若み汝等願望  
深さゆ一人れふと授るなり併わたりけ子三歳の時父母の中  
一人もさくちるぐ一はるむるなりと若むし志するも今け  
子三歳のにやれとて二人が身もさるる事なるともまよふれ  
さるりこそを思ひて神佛も空言れりるる佛菩薩の御  
告も一途は信用しるるとも又祓は戲言出於思也とぞるる

今紫のお肉は佛菩薩と俳落しむの苦安くは護法  
の若神是と罪一のつとや今と時をさるるを祓は  
黒雲を吹く雷電光り真といはくもたて教のつと  
汝何ぞ佛に妄語ありととらるる日月星辰八地は降る佛菩  
薩の語を決定して虚妄なりと三世の如来説のり汝三  
ひあ死ととさと汝がする所の子成長れ後世の中女人成佛の  
先達ともたつたると身かるとも養育せむたが佛乃加護  
よよろしく今まはく汝が命と知れよ其御恵とふ思還て仏を  
徳清らる其罷のらるるくと雨風とともまはく雷とくは落  
たんとて御臺はちるる勢と怒りるとのわらふりよそ忽

水の才病ふ  
臥しゆくを  
姫君臨終の  
念仏とま  
りやふ





終入むひりり人々驚きとてあつとてうりよは生るるともあつとてあひか  
くとしら明醫とまの針よ灸よと心とけくせそとら驗もは  
姫君愁歎凄めは掌と合せ二世の諸佛と禮拜し實ま  
我母定業必死かりそ如來れかと仍く今一度助け親子の  
言とめくせむとて

生親女れそ玉の結しぬれとてうりよは生るるともあつとてあひか  
かく泳どむ人姫君の深公御佛の照後よひかひそや御母上  
再び蘇生むひりり然しを御公地七然とてものともあつと  
志をくくあつとて言くあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
の鬼本とてたおのよとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと

穢かるるあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
けいそとてあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
御姫君と初御家門の衆中れはねの結しぬれとてうりよは生るるともあつと  
舞もえしぬれとてあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
しひひの諸天菩薩とてあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
西降りし中其の中はあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
かりは母心より招得の業病を治しとてあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
あつとてうりよは生るるともあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
て念佛とてあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと  
て一念一稱とてあつとてうりよは生るるともあつとて怖しや息とてうりよは生るるともあつと

八葉に蓮華ハ梵文帝釋と顯すく雲此のたこよのまなま  
 まより姫君清母乃花下まむり信天若神授けのよ清念佛おれを  
 わりかく思ふ御臨終まむり志とてむかといと懇こころあむの  
 清母をいと含むい雨此のよ合せ南無阿彌陀佛と唱へたかよぶ  
 程かろく水半月半かろく暑よはるこむい醫藥も更し驗なくと  
 ぞ清命も終かむとて阿若を氣かろ息の所よ豊成卿むらひ  
 てのむいハ吾才今まれ別れまもろくむらひく比翼連理の誓とを  
 ぞかひあろく君のこ塗れ川とてまむり携て渡りむらひとてあり  
 いろハ豊成卿いろくと曉くむい實よ生者必滅の理生死ろ道  
 心よ南をぬい元まれありとぬかり速く佛の力とをれと念佛して

先達く清土まより清蓮とてむらひく我はよとまらば  
 よこよ菩提とて中い一心よ念佛して一蓮ふ化生とてあつとろ  
 むくまむれ方とてむらひけ小轉く目と開くおそやろハ漸有く  
 いろよ豊成卿今れ御教よろよとて含意いこむらひはまむり  
 ぞろのハ皆終りたり思百の程もとろくやとろかなろ今ハ  
 極とてまむりこころハ家子かりかたのめく姫と情むらひとあり  
 くるよハ豊成卿聞むい愚かり親も又親かるとぞかなろハ疎  
 小とてむらひとてや心安ろとてこのむらひの方とてむらひは姫君とて  
 目ハ雙眼よ涙とろくまのむらひおと初とてまむり母が末期の詞と聞  
 むく世のろ幸よろよとてお親よ傍ものをもあまは僅五歳とて母よ

もろあつとらうもはこわご因縁ぞうーいんごもものこ  
控へて冥途へ赴く悲しき若成長せんと父前へ孝行を  
慈母のなごめく人とおもふまふ又月日もまふ父  
上も他へ人を好向く後の女く死する母と息大切うて  
後世とも申すーと御願の御とまふくあゝ死らる此成  
いと可愛れ娘やと後むむせひ所願をゆりく娘を教ふ  
ひ南無阿彌陀佛くと唱へて眠るがごとく息絶を  
を成卿娘君と始家門のくも孝も病と啼きけいひ  
のりあつとまかりとひど定まるとる業とく御菩提の明養  
子く御葬禮といふひ遂は野邊の樹となりたる哀と

もあつとりの凡そ世れ中の世帯れありとぬれとくこと  
人の行末なり化好れ家と御も又六郎とり妻やまらう  
あつと親子の是とあつとりのあつと野邊の樹後と  
の法弟より原れ秋風身うとく僕も名張とらうと白骨  
のこかり吾くたふ墓ならと浮世なりと思ふ誰後世と願  
ごんを御子中將姫と御母とよとかりとあつとりの秋後と沈  
あつと朝又香華社供養忘りぬと念解りてせむしあつと  
かなとらうちとあつと一用忘も近げむ追昔れあつとく阿  
陀佛はる遠と造らうめあつと明養の行源和尚と傳  
しく開眼供養あつと九月九日より十六日まで教ふの傳と

集め七日七夜のつる後夜集りて御法事といふありか  
 くるはるは事満座の女姫君の夢の中に容彩は是の  
 菩薩雪より下りて光明と照り寝所より来りて女姫君の  
 中に今なる穢悪を淨けよと現とありて如何なる聖者  
 ありてとせめりてありてと去りて今日に世と去りて汝も  
 ことごとく命終るとことの時汝が進むより所は陀界を  
 なる一翳を祓念とる信力は五障の女く亦くも極樂浄土  
 には住まう衆寶を蔵り蓮華より坐すとこれ偏に陀  
 乃願力なり悉く夢ありてはとこの後生とて成るゆ  
 び余いごとくかこよとて夢を成りて疑とてとて今  
 姿を現すとありてこの夢といふとて夢ハ夢とありて  
 修徳の心を起立塔像の切カをわらびとありて

中將姫一代記卷之三拾

中將姫一代記卷之三拾

